

## はじめに

岩崎 稔

ここに訳出したのは、韓国の漢陽大学の東欧史家、林志弦氏による「日常的ファシズム」論と、それをめぐる韓国の新進気鋭の研究者たちの討論である。これは、韓国社会のなかでナショナリズム批判の新しい潮流を形成する『当代批評』誌第十四号に掲載され、共感と反発ともごもの大きな反響を呼んだ。テキストについての詳細は訳者解題に委ねることとして、少なくともこれを、海外事情研究所の年間活動の集約である『クアドランテ』第五号にわざわざ転載する事情については、少し説明を必要とするだろう。

自らの闘いで独裁政権を打倒し、自由をかちとってきた韓国の民主化運動は、金大中政権下で新しい段階に入っていた。林志弦氏は、そうした民主化運動に対して、あくまでその解放的な意味を評価しながら、あえてそのなかに含まれる民衆の実体化やナショナリズムを問題視してきていた。また民主と独裁についての支配的な了解に異論を唱え、「日常的ファシズム」や「合意の独裁」というカテゴリーをも用いて、論争的な政治状況批判を展開していたのである。

本学の海外事情研究所に依る研究者たちは、『当代批評』を基盤として発言する知識人集団のナショナリズム批判には、そのつど刺激を受

けてきたが、その文脈で林氏の作業にも注目してきた。そして、彼らの議論の意味と妥当性を吟味するために、それをあえて九〇年代以後日本語圏で展開されてきたいわゆる「総力戦テーゼ」と比較して検討するという機会を設定したのである。それによって、日韓のそれぞれの議論の差異と共通点、さらに問題点が明らかにできるのではないかと考えたからである。

日本側のいわゆる「総力戦テーゼ」は、戦中戦後の断絶神話を再検討し、戦後の福祉社会における「生の支配」の起源を戦時動員システムの中に見る議論である。韓国の「日常的ファシズム」論が朴政権下での韓国の自立的近代化にひとつの焦点を見ているのに対して、「総力戦テーゼ」はさらに遠い一九三〇年代から説き起こしている。また、前者が一九九〇年代末に韓国論壇に投げかけられた問いであるのに対して、後者は一九八〇年代の後半における山之内靖のバイオニア的な仕事に端緒を持っていた。しかし、このような違いはありながら、両者は既存のナショナリズムにいつそう敏感な批判的議論を作り上げた点、またともにある種の「社会ファシズム批判」という性格を持つ点など、一定の類縁性を持っていたのである。

そうして、二〇〇二年二月十四日と十五日の二日間、東京外国語大学において日韓の研究

者が集まってワークショップ《グローバリゼーションの暴力を可視化するために》が開催された。ここに訳出したテキストは、この日の討論のひとつのプラットフォームとして、あらかじめ討論者全員に共有され、議論の素材として存分に活用されたものである。当日の行われた報告やコメントそのものは、別の形での出版形式が考えられているために、ここには掲載しない。せめて、シンポジウムの議論の地平を残すために、この討議の材料となった文章を本号に収録しておこうとした。

はたしてこの比較のための作業が当初の目的を達成したかどうかは、当事者であるわれわれにはいまだに判断しがたいが、すくなくともそれが日韓のネグリ派知識人の出会いの場を生むなど、いくつかの帰結や副産物を生み出すことにはなったと思う。